

☆子平研究者が、六龍師に直接インタビュー

## 六龍師四柱口伝

## そこが知りたい四柱の秘伝

## 対談だから引き出せた四柱の口伝・秘伝集

佐藤六龍・口述  
本間凡鯉・筆録

A5判 上製 函入

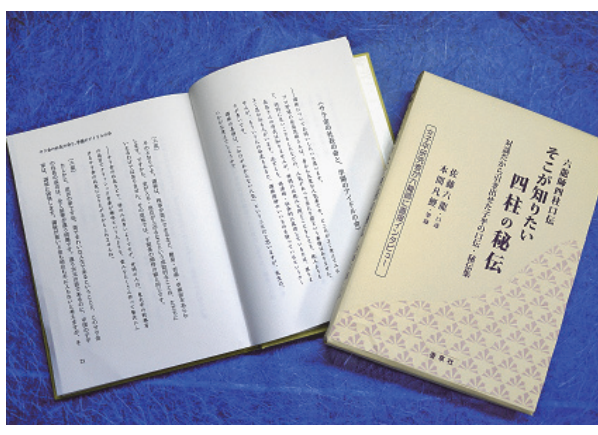
◆六龍師が子平研究者の質問に答える対談問答形式の書！

◆子平研究六十余年の、六龍師が積み上げた子平の知識を、あますところなく 聞き出して、ここに公開！

◆四柱の六親(変通星)・干関係の象意が、対談により実像で語られているため、目に浮かぶように理解できます。

■子平を学ぶ人がぶつかるさまざまな疑問や迷いやすい点などに、佐藤六龍先生が明快に解答——これまでの迷いが一挙に解消します

■インタビューをして「最も高級な思想とは、同時に、最も実用的な技である」との感嘆の 言葉を引き出した、素晴らしい透派・佐藤六龍先生の五術四柱(子平)を堪能してください



◇ ◇ ◇ 《はじめに (佐藤六龍)》より ◇ ◇ ◇

小説以外の書は、著者のすべて(知能・常識・社会性)が書の内容にかかわらずあらわれているものです。特に実用書と言われる分野の書(医学健康・食べ物・趣味・生活諸条件——など)には、その著者の個人的思索面が内容を通して強く公開されるものです。ところがその書を読む側を見ますと、一つの問題点があります。読者側があまりにあらゆる面で幅広いのです。考えも、常識も、知能も、すべてが違うのです。そこから書なり著作者なりの言わんとする所の受けとり方が違ってくるのです。

以上のような事をふまえて、今回は私が筆をとったのではなく、読者側の代表としての本間凡鯉氏に五術子平のあらゆる疑問・子平の思索方向などを、小生に問いかけてもらい、それに小生が答える方法をとりました。こうする事にやり、少しでも幅の広い読者側の子平術に対する見方・考え方にお答えできる、と考えたのです。

◇ ◇ ◇ 《あとがき (本間凡鯉)》より ◇ ◇ ◇

…前略… 子平の学習者、特に香草社の講習を受けずに書物で勉強した学習者は、「何である人は東大卒なのに、印綬が忌神なのか？」といった初歩的な疑問から始まり、「身弱の日主を弱めているが、忌神月干を弱めている干は喜忌どちらに取るべきか？」といった疑問など、様々な壁にぶつかることと思います。そういった一学習者の疑問を、甚だ僭越ながら、私が代表してお伺いいたしました。その記録が本書です。…中略…

本書には、古今の子平の名手、六龍先生ならではの解答が満載されており、先生は、ご存じのとおり、透派という最高の門派の秘伝を、最も正しい形で中国の専門から継承なさいました。緯書を専修分野とする日本の大学教授が束になつてもかなわないほどの該博な漢文力の持ち主です。万巻の中文の子平書を、文言文のもの、白話文のもの、選ぶことなく読破なされています。また、編集者として、長年、世の中の森羅万象と係わって来られ、常人の到底及ばない見聞の持ち主でいらっしやいます。

しかし、六龍先生が子平の名手でいらっしやるのは、第一に、世の中に対して正しいモノの見方を出来る方だからだ…というのが私の切実な感想です。

六龍先生の足元どころか、霧の晴れ間に遠くお姿を拝するしかない私ですが、疑問の答えは、秘伝書の字句にあるのではなく、世間や個人を捉える思想にある。そして、「最も高級な思想とは、同時に、最も実用的な技である」というのが、学んだ最大の戒めでした。…後略…

# 《本書の内容見本》

〔六龍〕

この人は、従強格です。年上忌財（年干に忌財が透干していること）は、社会性に問題があります。人に頭を下げない・気遣いをしない……。

月上は、環境を示します。処理能力のない父母に、キチンとしつけられずに奔放に育てられます。ただ、丁甲の木火通明がありますから、頭はいいですね。

——どうしてそこまでわかるのでしょうか？ 事実、大金持ちの娘で、わがままに育った人です。

普通、忌財が出ている命式は、怠け者とか判断すると思います。庚庚が二つということも剋しあう関係ですから、トラブルが絶えず起こるなどしか判断できないでしょうが。

〔六龍〕

象意というものは、固定されているものです。これは、言葉であらわすものですから当たり前ですが、その象意を、どう伸ばし、どう縮めるかが鑑定家の手腕です。

この人の命は、日干は二干ですが、印は日主を本当に生じていると考えてよいです。だから、頭は切れます。

従強にしては、やや不足していますが、従神は強いとみていいです。

日主が弱いのは欠点です。従強なのに、二干も財が出ているのが、キズです。

## 《目次抜粋》

なぜ、忌財不透は、裕福か？  
自分の中の自分。日柱と帰宿  
忌神運を避ける方法  
喜神運を活かす我慢  
試験の可否は命に出るか？  
遁甲と子平の吉凶原理は違う  
課長補佐と結婚した玉の輿の命  
浮木の嫌な上司と濁壬の英雄  
子平的な頭の良さ  
従格のキズ  
子育ての極意  
日主を生じない印綬  
順悖と真仮  
甲辛の逆剋と丁戊の炉の象意  
日主からみた凶／月干からみた吉

忌神の異性運  
血淋漓  
離れていても丙と癸は効く  
金無貴命の深層  
正位の象意は不定  
強すぎる戊は下固にならない  
妙に潔癖な白虎猖狂・  
妙な色気の荷葉蓮花  
身弱印強は比劫食傷を喜神とする  
年月の干関係が  
我が身に降りかかる  
厳しい剋と甘い剋  
官殺混雑・傷官見官  
よりも悪い関係  
年月の配合の救いの有無  
命式の枯

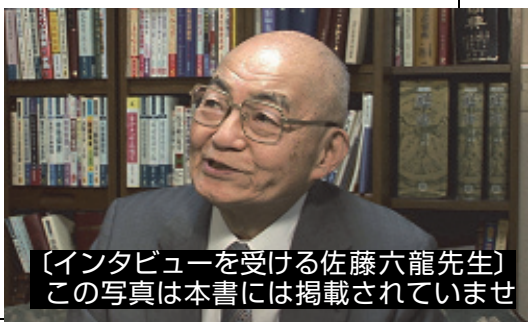
癸は、木を濡らし、循環する  
二重人格と痴漢と  
行運判断は、「急所」を見よ  
本物の財は少ない  
石の上にも三運  
洩天機の正体  
従格は自分の基準で行動する  
強弱の基準  
大運の間神運  
吉兆の軽重  
雑占の名手 初代・田口二州  
日本の遁甲の起源は意外と早い  
遁甲の要素が意味するもの  
六親の強弱の象意  
山は宗教ではない

注意

本書の前に、必ず『四柱推命活用秘儀』をお読みください。

参考書籍

四柱推命術奥義・四柱推命術五大秘伝集・四柱推命術極秘伝・四柱推命術密儀



【インタビューを受ける佐藤六龍先生】  
この写真は本書には掲載されていません